

最近筆者が見た作品をいくつか取り上げてみます。5本の作品を取り上げますが、何の脈絡もないように見えますね。こうした文章を書く際には、結末を伏せることが大切な前提となるのですが、筆の勢いでということもありますので御諒承下さい。

■ 金子修介『ゴールド・ボーイ』（2024）

紫金陳の原作「悪童たち」（原題「坏小孩」）の映画化で港岳彦の優れた脚本が光ります。紫金陳は1986年中国浙江省寧波生まれの作家です。主人公の少年は、少年法の適用範囲での犯罪を考え、巧みな方法で完全犯罪を企むのですが、果たしてこのクライム・サスペンスはどういった結末を迎えるのか、最後までどう転ぶか判らない緊迫感があります。作品としては、黒沢清の『Cloud』、塚原あゆ子の『ラストマイル』を上回る出来だと思っています。本作の原作者である紫金陳に興味を持ち、初期の作品である「知能犯之畏」（原題「設局」）を読み、その完全犯罪の見事な成立に息を呑むほどでした。完成度の高いクライム・ミステリーであり、今後の作品にも期待が膨らみます。

■ ジャン=ピエール・メルヴィル『影の軍隊』（1969）

第二次世界大戦下のフランス・レジスタンス活動を描いた極めて緊張感に満ちた作品で、丁寧な描写と映像の美しさは秀逸です。カメラはアンリ・ドカエ。原作のジョゼフ・ケッセル（1998-1979）という人物は、ブニュエルの『昼顔』の原作者でもあり、アナトール・リトヴァク『将軍たちの夜』（1967）の共同脚本家でもあります。メルヴィルは、本作の後あの名作『仁義』（1970）、『リスボン特急』（1972）を発表し1973年に55歳で死去しますが、そういった意味では本作は晩年の作品に当たります。長編デビュー作『海の沈黙』（1949）でも第二次世界大戦下のフランスの一般家庭に同居することになったドイツ軍将校、フランス文化に造詣が深い作曲家でもある、の物語で切り口の異なる戦争ドラマとして優れた作品でした。メルヴィルの卓越した美的感覚で独自の世界を構築し、ここでも沈黙の重さが表出するという劇的要素を高めながらも、映画の総合的な芸術性を高いレベルで示した作品です。本作では息詰まるほどのレジスタンス活動の厳しさと厳格なまでの組織運営は非人間的な冷酷さを伴ったものでもあったのです。主演のリノ・ヴァンチュラはもちろんのこと、ラストシーンのシモーヌ・シニョレの姿は目に焼きついてしまいます。戦争の悲惨さは、こうした日常的な生活の何でもない場面で起こる悲劇から痛切に感じ取れるものです。

■ ティム・フェルバウム『セプテンバー5』（2024）

ティム・フェルバウム（1982-）はバーゼル出身のスイス人映画監督でミュンヘンで映画の教育を受けた人物で、これまで本作を含め4本の長編作を発表、本作は共作によるオリジナル作品です。1972年ミュンヘンオリンピックの「黒い九月事件」の映画化といえ、ステイーヴン・スピルバーグの『ミュンヘン』（2005）がありましたが早く20年前のことで、この復讐劇はユダヤ人としての怨念のこもったものでした。その印象が今でも残ります。本作は、オリンピックの衛星中継に従事していたアメリカのABC放送による緊迫した現場での対応を丁寧に描きながら94分という上映時間の中で手際よく撮り上げられています。緊急時に求められる即断の重要性、意思決定の手法が何の銜もなく実行されていきます。再燃するイスラエルとパレスチナの戦いが行われる現在を意識して作られたのか（現在も続くパレスチナ・イスラエル戦争は2023年10月に始まりました。また、本作の公開は2024年8月でのヴェネチア国際映画祭がプレミアとなります）、それともメディアの背負う真実の追求の大切さと現在の情報過多・氾濫時代でのマスコミの立ち位置の確認のためか、問題提起の作品でもあります。第二次世界大戦で敗れた枢軸国だったイタリアは1960年にローマ大会を、日本は1964年に東京大会を、そしてドイツは1972年にミュンヘン大会を開催した事実にも目を向けたところでした。本作の日本版wikiでは製作は米・独とあり、英語版では単体となっていました。どちらが正しいのでしょうか。

■ 田中徳三『鯨神』（1962）

「クジラガミ」と読みます。原作は官能小説の大家である宇能鴻一郎（1934-2024）です。（札幌出身ですが、修猷館から東大国文科へ進みます）1962年の芥川賞受賞作で、大映はすぐに映画化を進めます。脚本は新藤兼人。監督は田中徳三（1920-2007）です。田中徳三は1958年に大映で監督デビューしますが、溝口健二の助監督を務め、他にも黒澤明、市川崑、吉村公三郎、伊藤大輔といった大家の下でも助監督経験を積み、大映のプログラム・ピクチャを支えた監督であり、大映の看板映画『悪名』『座頭市』『眠狂四郎』『兵隊やくざ』シリーズを手掛けた実績があります。これまた大映プログラム・ピクチャを支えた三隅研次（1921-1975）と同期の関係にありました。原作は長崎平戸の生月を舞台としますが、メルヴィルの「白鯨」を下敷きに日本的な解釈をもとにアレンジされますが、当時の評には「ジョン・ヒューストンの『白鯨』（1956）には遠く及ばないものの日本的共同体の因習の社会に、遅しく生きる男の姿を見事なカメラワークで捉えた」とあります。カメラは小林節雄（1920-2006）、名手です。勝新太郎が「書き出し」になっていますが珍しく助演に回り、実質的に本郷功次郎の主演作と言えます。

これは、鯨神と呼ばれ恐れられた巨鯨との心中劇であり、神と名づけられた最強の敵と格闘する人間ドラマであり、背後に隠れキリシタンとしての熱い信仰心も窺われます。大映としては、特撮を駆使しての異色の作品であり意外性のある日本映画であると言えるでしょう。

■ 市川崑『プーサン』（1953）

市川崑の意欲作と言うべきか。当時としては万人に受け入れ難い作品であったと推測できます。当時、市川崑は1915年生なので、38歳ごろ、脚本は夫人の和田夏十で33歳という若さ。市川崑という人を才気走り過ぎ、十年先どころか二十年先の感覚を持った映画作家だと筆者は考えるのですが、特に『足にさわった女』（1952）もその傾向が強く出ています。とにかく遊び心にあふれ、この辺りを理解していないと楽しめません。まさに1953年当時の「世相」と「世情」をダイレクトに反映し、それを風刺する作風であり、ブラック・コメディの要素も感じられます。朝鮮戦争・警察予備隊・学歴社会・女性の社会進出と採り上げられたテーマは多方面に及び、それらを深刻に考える訳でもなく、社会現象の一つ一つとして付き合うスタンスが貫かれます。主演は伊藤雄之助と越路吹雪。伊藤雄之助を主演に据える映画監督は、市川崑以外には岡本喜八くらいでしょうか。まさに適役です。